

明けて商売

暮れて商売

—— 中村あきゑものがたり



中村あきゑ 近影 (平成十五年八月)



生涯のパートナーだった夫 中村良一と （平成九年頃）

目 次

中村あきら	ものがたり	7
-------	-------	---

良一とあきらが創った中利の社風	49
-----------------	----

中利のやり方・中村光良(談)	51
----------------	----

孫から見た、祖父と祖母・中村信一郎(談)	64
----------------------	----

中村ファミリーのフォトアルバム	67
-----------------	----

中村家系図・鈴木家系図	72
-------------	----

ナカリ株式会社	概要	沿革	写真	73
---------	----	----	----	----

中村あきる

ものがたり

実家は商売が忙しくて、
ぶんなげられて育ちました。

私の実家は鈴木屋といって、中新田では二番手の米穀店で、南町にありました。

卸売りも小売りもする店で年がら年中、客や荷車が入り出して賑わっていました。母が五人姉妹の長女で父親が早死したために、十九歳の時に婿をとって商売を継ぎました。三人の妹たちはよその家に「あねこさん」として出され、末の妹は私たちの子守として家に残されたそうです。

婿だった父親は酒と選挙が大好きな人で、毎朝、私が起きる頃には居なくなっており、夜遅く酔っぱらって帰ってきました。私は母親と一緒にしよっちゅう大橋の袂まで、どこやら在のほうから千鳥足になって帰ってくる父親を迎えに出たものです。そして選挙になると何もかにもな

くなって、担いでいる候補の選挙事務所にいりびたりになります。なんでも昔、東京で誰やらの書生だったとかで、応援演説もたいしたじょうずだったそうです。

だから商売は母が中心でした。母はやり手でもあったと思います。長男の甚吉が手伝える年齢になってからは、母と甚吉兄とで商売をやっていました。甚吉兄はやがて家業を継ぎました。

私は大正三年九月一五日、四人兄弟の末っ子として生まれました。そんな家で子どもにかまっている暇なんかありませんでしたから、ぶんなげられて育ち、小さい頃からお店で手伝いもしました。小学校六年生を終えると古川高等女学校（現、県立古川女子高）に入学しました。六年を終えてから女学校に入る人、高等科二年まで行ってから入る人もあり、女学校の入学年齢はまちまちで、当時中新田小学校からは六人入学しました。

親は女学校に行けとも行くなとも言いませんでした。商売が忙しくて娘の教育などには興味が無いようでした。入学式にも卒業式にも来たこ

女学校時代（昭和5年頃）
右から二人目



徒の中でずっと十一番から二十番内の成績を取りました。

古川高等女学校は古川にあり、入学してから二年間、片道四十分の道を歩いて通いました。三年になると、軌道つこが出来て汽車通学になりました。同時に和服だった制服も洋服になりました。それまでは木綿の紫の着物にメリンスの茶袴の制服で、白梅の校章（バッジ）をつけ、

とがありません。隣の家の『中治』^{なかじ}という呉服屋の娘と私
が同い年の仲良しだったので、うちの母は『中治』のお母
さんに頼んで小学校から女学校まで、入学式、卒業式には
ついでに付き添ってもらいました。『中治』のお母さんは
宮城一女高を出た教育熱心な人でした。女学校にも『中治』
の娘が行くというので私も一緒に行くことにしたのです。
まあ、私はひとりで勝手に決めて入ったようなものです。

親は成績にも関心を持ちませんでしたが、私は勉強が嫌
いではなく、小学校では優等生でしたから、女学校にもす
んなりと入学できたのです。女学校でも百五十人ほどの生

下駄履きでした。靴など見たこともなく、洋服になっても履物は下駄でした。靴を履くようになったのは戦後です。

兄弟は皆、それなりに頭が良かったと思います。特に次兄の甚二郎は優秀で、古川中学校から初めて仙台の二高に合格し、さらに東北帝大（現在の東北大学）の医学部に合格して医者となり、仙台で耳鼻咽喉科を開業しました。奥さんは仙台でも指折りの資産家だった北六番町の塩沢家の出です。現在は三代目の孫が仙台市立病院で耳鼻科の医師をしています。

桜の木の根っこに手紙を隠して交換。
家の反対を押し切って結婚しました。

私は恋愛結婚です。夫になる中村良一さんの家、中利商店は新町にあ

り、米穀の他に肥料や牛馬の飼料、ふすまなどを扱う店で、私の実家鈴木米穀店に出入りしていました。昔、この辺の店は玄米でなくて粳を買って、それを自分の家で挽いて米にして、検査して出荷しました。中利商店は鈴木米穀店から五〇〇円とか一〇〇〇円とか前借りで粳を買っていき、後で支払いに来る。その計算は大抵夜で、親の代理で良一さんが支払いに来ていました。それで知っていたのです。背が高くて、柔道をやっていて体格も立派。力持ちでもありました。チビの私はまずそこに惚れたわけですね。良一さんが古川高校生、一年下で私が古川女学校に通うようになってから、お互いに好意を持っていることが分かりましたが、今のように交際などできるわけがありません。桜の木の根っこに手紙を隠して交換しました。何度か、冬の雪の日の学校帰り、良一さんの背中におんぶしてもらって、西古川から家の近くまで帰ってきたことがあります。大きい良一さんの背中におぶさってマントに覆われると私はすっぱり隠れてしまい、大木に蟬です。すれ違う人がいたとしても荷物でも背負っているのだろうと思ったでしょう。手紙の交換とおんぶが今

でいうデートというものだろうと思っています。

昔は男子高は五年、女子高は四年で卒業となります。良一さんも私もいずれ結婚をしたいと思うようになりましたが、まだ口に出さないまま、良一さんは卒業して一九歳になるとすぐに、志願兵として仙台の四連隊に入隊しました。世間になにやら騒がしい感じが漂いはじめていました。その当時は徴兵制度があつて、二十歳になると徴兵検査を受けて兵役に服する義務があります。良一さんは「とにかく二十歳になれば自分は必ず甲種合格になつてどっちみち入隊しなきゃなんねがら、今のうちに志願兵として、二年間勤め上げてくる。二年間だけ必ず待つていてくれ」という最後の手紙を桜の根っこに残して入隊していきました。それがプロポーズでした。

私はかたくなに守りました。うちでは、「あんだなんて中利商店さ入つたつて勤まんねからだめだ」つて反対でしたが、頑張りました。私は良一さんに惚れてしまったんだわね。二年後、兵役を終えて帰ってきた良一さんの元に、昭和九年の十二月末に嫁入りました。



中村良一・あきゑ 昭和九年十二月



結婚前の十九歳頃（九年六月頃）



中村良一（二十歳頃）



新婚旅行は松島（昭和十年）



初代 中村利三郎

とても家の中になど居られない。

舅、主人を口説き、

嫁いで二年目にお店に出る。

親の心配通り、嫁いだ中村家は大変でした。舅は優しくったのですが、姑が厳しい人です。すぐに戸籍も入れてもらえず、九年に結婚したのに、籍が入ったのは十一年、光良がお腹に入ってからでした。昔はそういう家がうんと多かったのです。入籍すると面倒ですからね。入籍しないで

おけば、家風にあわなければ追んだすとか、子供産まれなければ追んだすとか、昔は平気でしたから。

中流以上の家庭では「あねこさん」というのを使っていました。実家にも二人いたし、中利商店にも二人いました。近隣の在所から若い女の子が、家事をやりながら、しつけもおぼえるということで奉公に来るのです。実家

の母の妹たちも”あねこさん“をやりました。

嫁の私はその”あねこさん“よりもひどい待遇でした。

とてもとてもこの家の中にはいられない。お店に出てひと働きすつかという考えが浮かびました。一年目は家の中で辛抱したものの、二年目になった頃、まず主人の良一さんを説得し、次にお義父さんをお願いして、店で働けるようになりました。バンザイです。

ところが、徒歩では仕事になりませんから自転車を覚えなくちゃなりません。集金、注文取りに駆け回るには自転車なのです。当時は産婆さ

んだけが、女子用の自転車に乗っていました

た。他は皆、男子用自転車です。練習は三

角乗りから始まって、河原に何べんも落ち

ました。私は小柄なのでなおさら大変でし

たが、道もコンクリートでなく土だったの

で、怪我も何んにもしなかったのです。や

つと自転車を覚えて、それ宮崎だ、小野田

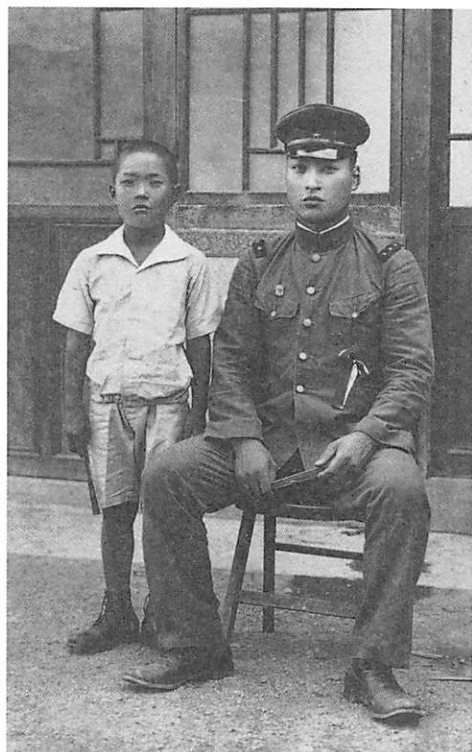


三角乗り

だ、西古川だと、注文取りに走り回りました。冬はふんごみ（もんぺ）、夏は腰巻き姿でした。家の中で子育てや家事をやっているよりも商売に走り回っているほうが自分の性にあっていることをあらためて感じました。

七カ月の身重の時、 良一さんに赤紙がくる。

昭和十二年七月七日、廬溝橋事件をきっかけに日中戦争が起きました。北京郊外の廬溝橋で日中両軍の武力衝突がおこり、宣戦布告もないまま戦争に突入したのです。風雲急を告げるように、世相が慌ただしくなってきました。七月のなかば過ぎ、突然良一さんに招集令状の赤紙が来しました。中新田で第一着、トップバッターの赤紙です。背が高く、



召集礼状が来て出征する時（昭和十二年七月）

柔道をやっていて体格も良かったので、まっさきに目をつけられていたのではないかと思います。

入隊まで、三日間の猶予しかありませんでした。私は妊娠七カ月の大きなお腹をしていました。婦人会なんかたすきして、子どももおとなたちも近所中皆、総出で「勝ってくるぞと勇ましく」と歌い、楽隊も出てラッパや太鼓を吹き鳴らして見送りました。良一さんは陸前高田に入隊しましたが、それから一年ばかり消息が途絶えてしまい、どうしているものやら、どこにいるやら分からなくなりました。気がもめてもど

うすることもできません。そのうちに軍事郵便が来て、中支の小糸部隊に所属していることが分ってひとまず安心したわけです。帰ってきてから聞いたところによると、中支は歩いても歩いても平地で、境目など分からないほど広がったそうです。

その年の九月二十九日、長男、光良が産まりました。実家から産後の扱いに“あねこさん”がきました。昔はお産をすると、実家から手伝いの“あねこさん”が三週間ほど婚家先に来るのです。姑が自分勝手に厳しい人なので、“あねこさん”は三週間のうちに三人も替わりました。「あんだ、ほんとによくこの家にいだもんだってば。おれはとつてもいられねえ」と言つて出ていったのです。

十一月、十二月の始めのころまで、菜っ葉は川で洗います。手が切れるようで感覚が無くなります。光良をおぶつてこの鳴瀬川に入つて死んでしまおうかと川のほとりをさまよつたこともありました。

それから四年、光良が満四歳になった昭和十六年十月、やっと良一さんが中支から陸前高田に戻つてきたという知らせが入りました。帰宅するという連絡が来て、いよいよ迎えに行けるかと喜んだのも束の間、私は行かせてもらえず、お義父さんが光良を連れて迎えに行きました。私は本当にがっかりしましたが、仕方ありません。そして、帰つてきたら、こういうおう、ああいおうと思つて待つていました。ところが帰つてきて、

「幼い子どもを抱えて、よくこの家に居てくれたな。ありがとう」って言われたら、涙がぼろぼろって出て何にもいうことができませんでした。



あきゑ 光良社長 良一の妹

統制経済で廃業。大東亜戦争勃発。

良一さんはまたまた徴用される。

すでに昭和十四年、米、飼料などの穀類は余米まですべて政府に強制的に買い上げとなり、米、雑穀、飼料などを扱う店は廃業せざるを得なくなりました。食糧営団という国の機関ができて、商売を取り上げられた米屋のだんなたちの多くは営団に職員として勤務しました。さらに昭和十六年には、統制が強化され、穀類の他、砂糖、油、衣類なども切符制になりました。

我が家も廃業です。せっかく、無事に良一さんが帰還したものの、この先どうするのか先がみえないまま細々と暮らしていた中、お義父さんが中山平の温泉旅館を一万五千円で買ってきました。自炊の湯治場です。中利旅館として三年ほどやりました。湯治場といっても旅館の女将など

性にありません。とくと嫌になって、「売れ、売れ」とお義父さんに何度も言っているうちに、山津波に遭ったことがきっかけで旅館を手放し、中新田に戻ってきました。次男光利は中山平で生まれました。

昭和十六年十二月、今度は大東亜戦争がはじまりました。日本軍の真珠湾攻撃がきっかけです。帰ってきたのも束の間、また、良一さんが徴用されました。今度は平塚の海軍工廠の所属になり、平塚に出立して行きました。

そうしているうちに、十八年の十二月一日にお義父さんが脳いっ血で突然亡くなりました。朝、さっぱり起きてこないと思っていたら、夜中にうんと吐いたらしく、お義母さんが気がついた時はもう冷たくなっていたのです。慌ただしい戦争のさなか、簡単な葬儀を出しました。戦時中の食べ物は菜っ葉、大根、芋などです。米は昭和十四年に統制食糧になり、国の管理下に置かれていましたから、米どころの中新田でもそうたやすく口に出来ませんでした。葬儀の法事料理には少しばかりの餅をつき、干し柿を刻んで餡の代わりに入れました。砂糖が手に入ら

ないので、あずきの餡を作ることが出来なかったのです。

お義父さんが亡くなったのをきっかけに私は役場をお願いに行つて、良一さんは平塚から多賀城の陸軍工廠に移ることが出来ました。

仙台が爆撃されて、主要都市がみんな焼夷弾でやられて、今度は原子爆弾で長崎だの、広島だのやられて、今度はどこやられんだと不安に思つてるうちに終戦となりました。

昭和二十年八月十五日終戦。良一さんは無事に帰つて来ました。今回の徴用では戦地に配属されずにすんだので無事に帰つてこれたのかも知れません。なにしろ、終戦直前の大陸や南の島は激戦地となり、たくさん日本兵が戦死したり、捕虜になったことを後になって知りました。やつと帰ってきたものの、ないないづくしで何もありません。お店も廃業です。お金もないし、物もない。娘の富子が戦後二十年に生まれたので、私たち夫婦とお義母さんと子ども三人、家族六人が食べていかなければなりません。

仕方ないので百姓をすることになりました。新田という地域に一町歩

ばかりの原野があり、「こいつを開墾すんべ」となったのです。野良仕事はやったことはありませんでしたが、生きていくにはやるしかありません。良一さんとふたりで毎日開墾し、馬鈴薯、大麦、小麦などを植えましました。まだ幼い富子をタンスの把手に紐で結わえておいて開墾に行ったものです。二年もやったでしょうか。私はつくづく嫌で、「やんだ、やんだ、なにか商売したい」と何度も言いました。

闇の古着商売で

良一さんが進駐軍にしょっぱかれ、

私は仙台の進駐軍裁判所に乗り込む。

古着屋でもやっぺということになりました。新しいものはなかなか手に入りませんから、古着屋が流行っていたのです。実は衣類の販売も統

制で、やるには闇商売。それだけ需要が多いということです。やっぺとなっただけけれども、まずもってお金が必要なので、私が実家から持ってきた着物を、交換会というのに出して売りました。物がいいので一時間もたないうちにたちまち売り切れました。実家の母親はそれを聞いて嘆きました、背に腹は変えられません。その金で、農家の作業衣だの、紺地の股引生地だのの綿反を仕入れました。それらはうんと売れたのです。中新田に朕さんという中国人の屋台ラーメン屋が居て、夜、ピーピーと鳴らしながら屋台を引っ張っているのですが、その人が浜松の方から綿反を持ってきて、私たちはそれを買って売りさばいたのです。そうしているうちに、浜松から郵便局留めでうちに直接小包みが来るようになり、郵便局に受け取りに行きました。しばらくすると、その浜松の売人が統制の網に引っ掛かりました。浜松の人も中国人でしたから、日本の警察ではなくアメリカの進駐軍の警察（GHQ）に捕まったのです。本元がひっかかったから、帳簿に記してある中村良一も連座して挙げられました。中新田町では四人ほど挙げられたようです。

進駐軍がジープでやって来て、良一さんは連れていかれました。どこに連れていかれたのか分かりません。

仙台では現在の国際センターの場所に進駐軍の警察と裁判所がありました。周囲にはアメリカ軍が家族で赴任していて、アメリカ軍の宿舎がたくさんありました。(今、八木山のマンションに行くとき、国際センターの前を通るのでよく思い出します)。実際は何百反と売ったのですが、帳面に記載されたのは綿反、股引地、農家の作業着十五反だけでした。

さて、良一さんがどこに連れていかれたのかしばらくの間居場所が分からず、毎日、気をもんで心配ばかりしていましたが、約四十日ぐらい経って暮れも近づいた頃のこと

です。アメリカではクリスマスを大事にするから、この時期をうまく使えばなんとかなるんじゃないかと私は突然思いつきました。そして私一人でよそゆき



標準服

の大島紬の標準服を着て、仙台の進駐軍の裁判所に乗り込んでいました。アメリカ人の裁判長は山形へ出張していないというのですが、日本人の一等通訳と会うことができました。一等通訳に「何したんだ」って聞かれて、「綿反十五反売ったためにジープがやって来て夫が連れて行かれて、どこにいるもんだか、わけわがないんです」と訴えました。したら「中村さん明日、五十万のお金を持ってこれるか」と聞かれました。「私の家ではいますぐ用意できないけれども、兄が仙台の清水小路で医者しています。親類も皆いいから、明日に必ず五十万の金を持ってきますから、どうぞ主人を返してください」って、泣きながら言いました。一等通訳はちよつとの間、考えていましたが、名刺に自分の住所を書いて「今夜来てみなさい」と言いました。八幡町でした。私は喜んで医者をしている兄の家へ走りしました。兄は「よし、ほだら今夜行くからおらえ（家）さ泊まれ」となり、兄と二人でその一等通訳の家に行きました。そしていろいろと話をしました。話を聞きおえた一等通訳は「明日ね、中村さん、うんと汚い服を着て裁判所にまた来なさい」と言ったのです。

次の日、私はよそいきの大島紬ではなく、普段に着ている腐れ標準服を着て裁判所に行きました。アメリカ人の裁判長は、アメリカ国旗を背にしてイスに座っていました。太い指全部に指輪をかけていました。私は泣きながら「家では十五反しか反物は売んねんだ」って言いました。食うために売った、家にはお祖母さんと子供三人しかない、夫がいないと大変なことになる、どうか主人を帰してほしいと泣きながら訴えました。それを一等通訳が、英語で伝えました。その日は中新田に帰ってきました。

そして翌日、お義母さんが「なんだべ、良一が帰されて鈴木耳鼻科にいるんだ」と言うので、びっくりしてまた仙台の兄のところへずっといきました。そしたら確かに良一さんがいたのです。即時に、執行停止になって、すぐに帰されたのです。

その晩に、また兄と二人で、一等通訳の家に五十万円を持って行きました。そしたら、「あなたたちの兄妹愛に私は負けました。これはいりません」と、受け取られませんでした。

その後まもなく、一等通訳から連絡が来ました。裁判官がクリスマス休暇でアメリカに帰るので何かお土産を持ってきてくれっていうことでした。そこで、立派な九谷焼の徳利とお猪口のセットを届けました。うちのお義父さんが焼き物好きで、戦前に金沢に行った時に買ってきた高価な物で、桐箱に入っています。彩色が華やかで金も使っていますから、アメリカ人も気に入ったに違いありません。

一等通訳が届けたら、「クリスマスをグランドマザーやチルドレンとご主人と楽しくおくりなさい」と裁判官が言っていたと返事がきましたが、一等通訳の言葉の中で、実際はグランドマザーとチルドレンしか英語が分からなかったので、たぶんそういうことだろうと思うわけです。

しかし、なぜかわかりませんが、良一さんは連行されたこの事件に触れられることを嫌がり、ついに死ぬまで語りませんでした。私もあえて聞こうとしませんでしたから、一体どこに連れていかれ、どこに入れられていたのか知りません。

私もあの苦しみは思い出したくありません。一カ月も眠れませんで

したから。よく一人であのGHQに行ったものだと言ってもたまげます。今でも思い出すと、涙が流れます。

それでも後で考えるとつくづく幸運だったと思います。約束も無しに乗り込んでいった裁判所で一等書記官に出会えて、良一さんがすぐに帰されたのですから。中国人の朕さんは東京に連れていかれ、巣鴨刑務所に入れられていたと聞きました。

昭和二十六年、第一次米穀集荷業者に 登録し、再出発。

昭和二十五年にはお義母さんが亡くなりました。お義父さんとおなじ脳いっ血です。昔の食事は塩っぱい漬物でご飯を腹いっばい食べるというものだったので、脳溢血が多かったのです。

昭和二十六年、それまで農協しか登録できなかった一次米穀集荷が二元制となり、農協以外の業者も登録できるようになりました。一次集荷業者になるためには五十人の農家に契約してもらわなければなりません。綿反販売もだめ、肥料もだめ、すべて統制で何もできずにいたわが家ではすぐにこれに飛びつき、登録することに決め、申し込みました。問題は、農家を集めなければならないことです。田を作っている既存農家十人、それから開拓農家四十人を取することにし、良一さんと手分けして説得に走り回りました。

清酒など売っていませんでしたから、自宅でどぶ酒こさえて、飲ませるの説得です。そうこうしてようやく集荷業者の登録が出来ました。中新田では第一号、中村あきゑの名前での登録で金看板を挙げました。私の名前にしたのは理由はあります。

登録に際して、うちでは持っていた山を三十万円で売って、世話人に二万円渡し、二十八万円と餅をついて土産に持って、仙台の福田商會を訪ねて肥料を売ってもらえるよう頼みました。福田商會から分けてもら

った肥料を農家に売って、出来た米を買い上げるといわけです。肥料に困っている農家獲得にも有効です。

福田商会はどんどん肥料を送ってくれました。当時は自動車もなにもないから、牛車に肥料をつけて農家へ配りました。冬は馬そりです。やがてマツダのオート三輪車っていうのが出たので町で一番先に買いました。

当初、米三百俵のスタートでした。集荷業者は毎年、登録替えていくのがあって、そのたびに、農協から既存農家を引っこ抜いて米の扱い高を増やしていきました。なにしろ開拓農家は米ではなく、ほとんどが大麦、小麦、豆、菜種を栽培していましたから、米を増やすには既存農家をひっぱってくるしかなかったのです。米は政府のものなので、食糧事務所からきて検査して、支払い証書というものを作ります。それが正規米です。

危ない橋も渡りました。闇米の売買です。当時、政府の配給米だけでは家族全員がお腹を満たすことなどとても出来ず、国民の多くが闇米を

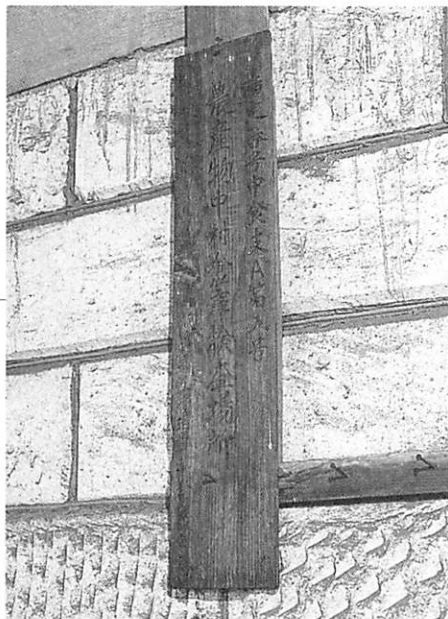
買いに奔走しました。取り締まる側の役人も買っていたと聞きます。

闇米は月の光で運びました。夕方薄暗くなる六時頃になると、仙台方面から車がやって来ます。吉岡あたりまでオートバイの先兵が走り、取り締まりの見張りがいないかどうか確認してから、発車させます。たまに見張りがいたという報告があり、発車できないこともありました。なにしろ、くず米も引つ掛かったのですから。

闇米を流していた時代は、朝早い商売なのに夜もその通りなので、夜十二時前には寝たことがありますでした。

昭和三十年代、仙台では松崎糧穀、阿部勝、菊専の三軒の間屋もクズ米で引つ掛かりました。うちはそれらの問屋に売っていたのでそのたびに名前が出て、仙台北署から呼ばれて始末書を書かされました。統制、統制なので、いつ捕まるかわからない。だから、食糧事務所に登録に行った時、中村良一の名前にしては危ないというので、中村あきゑの名前で登録したというわけです。中利商店主として中村良一が始末書を書かされても、登録業者の看板は中村あきゑ、という逃げ道を作ったのです。

今も岩蔵にかかる「指定番号中食支A第五号 農産物中村倉庫検査場所 責任管理番号 中村あきゑ」の看板



そういう時代でした。まず神経使いましたね。うちでは始末書ぐらいですみましたが、その時代、ずいぶんたくさんの業者が食管法違反で刑務所に入ったものでした。

開拓農家が、菜種、大麦、小麦、豆などを肥料の代金がわりに置いていくので、中利商店では雑穀を買うということが際立つようになり、

今度は雑穀屋が売りに集まってくるようになりました。一日に二十台も、三十台も車がやってきます。現金払いだから、お金が必要で銀行から借りることになります。銀行に七百万の枠がありましたので、目いっぱい借金を申し込んだところ、担当者が間違えて、八百万貸してよこしました。うちでは喜んで、すぐに買い付けの支払いに充てましたが、数日後、銀行が、「間違えたのですぐに百万を返してほしい」と言ってきたのです。お金はすでに品物になってしまっています。「ほんとにこんな若い野郎っこに、こんなこといわれて」と、とても腹が立って悲しかったことをは

つきり覚えています。商売は金がなくちゃダメだ、金さえあつたら何もいわれることはないと身に染みて感じ、それからは何にがなんでも金をためなくちゃいけない、と思つていつそう商売に励みました。

中利商店の商売は雑穀と米の両方になりましたから、クズ米の上に豆を乗せて隠して運んだものです。

また、事前の連絡も無しに売人が突然、豆や麦を車に一台積んで来てやつて来ることも珍しくなく、うちでは支払いの現金が足りず、良一さんが銀行に走り、口座にお金がないので銀行に交渉しているらしく、なかなか帰つて来なくて、その間売人にお茶、お菓子を出して機嫌をとつて、さまざまな話をして引き延ばしたり、ということは何度もありました。その度に金が無くては商売はダメだという思いを強くしたのです。

光良が仙台商業を卒業して、中利へ入る。

個人商店から企業への脱皮。

そんな頑張りが実を結んで中利商店は順調に大きくなっていきました。昭和三十一年、長男の光良が仙台商業高校を卒業して商売に参入しました。

同時期、蔵を建てたことをきっかけに中利商店を株式会社としました。蔵の税金が高いことにびっくりして聞いてみたら、会社にしたほうが経費を見てもらえるのでいいということが分かったのです。

鎌打ち工場の払い下げがあり、即うちで買い取り、表は事務所、裏は工場、それから倉庫兼用にしました。また、クズ米は玄米だと引つ掛かるので白米にすれば大丈夫だと知り、白米にして米菓や味噌、醤油屋に売ることを思いついて、精米機を大阪から買って徹夜で精米し、私と光



社屋ビル落成（昭和四十六年）
現六号倉庫内



良と二人で、岩手県、紫波の阿部製粉まで売りに行ったりしました。往復八時間かかりました。そんなことを繰り返しながら、工場を建て増し、倉庫を建て、また建てて、三千坪の土地の中を建物ぐるっと廻るほどになりました。

光良に嫁をむかえ、十二年後、腐れ家だった自宅を壊してビルに建て替えました。落成したのは昭和四十六年です。

ビルの一階を事務所にし、二、三階を自宅にしました。

それまではほんとに腐れ家だったし、前の道も悪く、おまけに車も悪かったのでしょっちゅう家の前で車のタイヤがパンクしては夜中にドンドン戸を叩いて起こされたものです。だから、ビルを建てる時、建設会社の社長が「果してこんな腐れ家に住んでいる人が三階建てのビルを建てて、二、五五〇万円もの金を払えるのか」って言ったそうです。

それから二十年間ビルの二、三階に住みました。平成三

年、孫の信一郎に嫁を取る時をきっかけに、現在の家を建てて引越しました。六百坪の田んぼを埋め立てて、建坪は一五三坪。それまで、二三階に三世帯住んでいたので皆、窮屈な思いをしましたから広さは充分取りました。

嫁のちゑ子は三本木からきました。縁談が起きた時、ちゑ子の実家では、中新田に聞きに来たそうです。十軒聞いて九軒まで中利商店なんか、あと二年で傾くとか、男まさりのかあちゃんでも勤まるもんじゃな何とか悪口を言ったそうですが、一軒だけあそこの家はたいしたもんだ、大物になる、と言ったそうです。ちゑ子も光良を見込んで来てくれました。今でも感謝しています。働き者でしつかり者の本当に優れた嫁です。習ったわけでも無いというのに毛筆も上手、仕事は手早く、後始末もきれい。やった後が美しい。私は家事が嫌いだし下手なので、なおさら感心しています。三人の子どもにも恵まれ、私も三人の内孫のおばあさんになり、さらに曾孫も出来ました。

光良の長男、信一郎はすでに商売の第一線に立っています。

次男 光利のこと――。

昭和四十三年四月には、次男の光利が帰ってきました。光利は東北学院大学を卒業して東京の山一証券に勤めていたのですが、山一がなんだかおかしい、というので辞めて中新田に帰ってきたのです。県の米穀肥料商業協同組合にしばらく勤めた後、中利で働けということになり、常務として活躍しました。光利は商才もあり、覇気も満々だったので、走った、走った。走りの商売人でした。

しかし、光利は平成八年十一月九日、満五十三歳で亡くなりました。前から体が弱く、腎臓が悪かったのです。酒の飲み過ぎも追い打ちをかけたかもしれません。光良と一緒に頑張って会社を大きく育てたのに、私の生涯の中で、最も悲しいことでした。

商売商売で子どもは、
ぶんなげて育てました。

私は若い時から商売、商売で生きてきました。子どものこともさっぱり構ってやりませんでしたから、子どもたちは少し大きくなると何事も自分でやりました。

弁当をつめてあげたこともないのです。光良も光利も自分で弁当を作って学校に行きました。たまたま朝早くやってきた実家の兄が、その光景を見て、「新町のワラシ共はたいしたもんだ。自分で弁当つめて学校に行く」と言ったそうです。

昔は舗装もなく道路が悪いので、家の中に土ぼこりが舞い上がって板目（台所の床）が真っ白になります。光良は学校から帰ると、板目を拭いてご飯を炊いてみそ汁も作っていたものでした。

子どもに贅沢をさせたり、おもちゃを買ってあげたこともありません。

娘の富子が子どもだった頃、仙台の鈴木耳鼻科に連れていった時のことです。富子は鈴木家にあつた人形を気に入ってしまいました。帰る時になつても離さないで困っていると、兄の奥さんが「帰りにこれで人形を買ってもらいなさい」と千円くれました。鈴木家を辞して歩いていくうちに、私は人形なんて買うよりもおまがね（ご飯のおかず）でも買ったほうがいいという気分になり、そのまま買わずに帰ってきたことがあります。その頃は人形を買えないほど貧乏ではなくなっていました。子どものおもちゃなんぞにお金を使う気持ちがないのです。商売を安定させて、会社を大きくすることしか、考えてこなかったのです。富子は塩釜市のお茶の老舗、矢部園に嫁いでおります。

また内孫の浩子が嫁に行った中新田の伊藤家から、「中新田一の嫁を頂いてありがとうございます。どんな育て方をしたのですか」といわれましたが、私などは、「ハイ、商売で忙しいんで、ぶんなげて育てました」（笑）としかいえません。



良一、秋の山の手入れ
(平成四年)
加美町(旧宮崎町)大
平 県の保安林になっ
ている

山を買うのが好きだった良一さんを見送る。そして私の今――。

良一さんは山を買うのが好きで、あちこちの山を買いました。周旋屋が来て買わせられたのですが。戦後は山に植えた杉に値打ちがありましたから、杉はいいもんだと、山を買ったのです。宮崎の大平っていうところに六十町歩、一日歩いたって歩きつけらんねとさ。それから小野田、岩出山、花山、山形の酒田や秋田県内にも持っています。金庫いっぱいに権利書がありますが、今は何にもありませんね。山を買うのが好きなのは良一さんの父親の利三郎さんの血筋なのでしょう。戦後三十万で売ったのは利三郎さんが持っていた山で

した。

もう山は値打ちがないので、光良の時代には仙台にマンションを買い求めています。それを私が管理しています。

主人の良一さんは非常に丈夫な人でしたが、平成元年頃から体調をくずし、入退院を繰り返しました。平成八年九月、工場でころんで大腿骨を折り、それから急速に体力が衰えて、平成十年三月十九日、あの世の人となりました。中新田のバツハホールを借りて、惜しみないお別れを致しました。お世話になった大勢のお得意様にもお出でいただいてお別れをしていただき、良一さんも満足だったに違いありません。私も主人を亡くした悲しみと商売をしていたありがたさを同時に感じたものです。

私は死ぬまで現役。現在も事務所に毎日通い、マンションの管理を行っています。定期的な外回りの清掃業務などの他に、中には古い建物もあるので、水漏れ、排水管のトラブル、などさまざまな用事が出てきます。それらの指示、手配が私の担当です。

たまの楽しみは旅行です。六十代の旅友達を見つけたので、二人で誘い合って、日本のあちこちに出掛けています。仙台の病院にもひとりで行きましたが、先日、「ひとりで来ないで下さい。説明を家族に方にも聞いてほしいので、家族の方と一緒に来てください」と叱られてしまいました。

平成十五年の六月には、畑仕事のやりすぎで生まれてはじめて腰を痛めてしまい、歩けなくなっていました。床に臥せったのはお産の時だけ。八十九歳の今日まで病氣や怪我で寝込んだ経験が無い丈夫な体なので大変気がもめ、やるせない思いをしました。旅行もキャンセルして、治療に通いなんとか回復しました。嫁のちゑ子にはすっかりお世話になり、家族のありがたみを感じた二週間でした。

実家もなんだかかんだか皆死んでしまつて、私の甥っこ、一人になりました。東京におります。米穀商をしていた実家は跡継ぎもなくなり平成十五年三月の末、店を閉じました。うちの曾孫は一番上が女子で小学五年生です。二番目が年子の野郎っこで四年生。三番目は双児で男子と

女子です。二番目で長男の習が五代目になる予定で、自分でも五代目になります、と外でいったということを聞いて頼もしく思っています。

まずこうして考えてみると、事業は後継者が一番ですね。家が繁栄するのも、没落するのも跡継ぎ次第です。そういう意味ではうちは恵まれています。

良一とあきるゑが創った

中利の社風

—— 中村 光良（談） ——

—— 中村 信一郎（談） ——

中利のやり方

中村光良（談）

初代中村利三郎が戦前に肥料を扱う中利商店を創業し、二代目、良一とあきゑが戦後、米穀集荷業者として改めてスタートしました。昭和三十一年、株式会社中利商店を設立し、家業から企業への転換を果たしました。

米穀集荷業者から再出発し、加工原料米の商売になり、利益から税金を払いながら設備に資金を投入して会社を大きくする、というのが中利のやり方です。利益を上げるためには生産設備が必要でした。生産設備は動かせば利益が出ます。原価償却は機械によって十年もあれば、十二年もある。定められた税法によってどんどん設備を大きくしていきました。その次に節税対策としての不動産（マンション）を購入していきま

した。その理由は、中利は一年に一回しかとれない米を商売にしている
ので、リスクを分散することです。例えば、昭和五十五年から五
十八年までは米が不作の年でした。そして平成五年は大凶作の年でした。
会社はそんな時にも社員を抱えているので、なにか収入の上がるものを
抱えていないといけない、ということが始まったのです。そして賃貸業
がひとつの柱になっていきました。

さらに米の加工をやっているわけですから夏場には保管していた原料
が傷みます。今度は低温倉庫が必要と考えて建てた後、米過剰の時代を
むかえます。四十年代後半七五〇万トン、五十年代六六〇万トンの過剰
米が出ました。政府で入れる倉庫がないので貸してくれということにな
って貸すことになりました。はじめは宮城食糧事務所の指定倉庫だった
のが、その後、国の営業倉庫のライセンスを取って農水省営業倉庫の指
定をもらいました。五十二年に五〇〇坪の倉庫を作り、後は六十三年に
また五〇〇坪。今、合計一〇〇〇坪の倉庫を国の過剰米保管に貸してい
ます。保管料がかなりの収入になっています。現在は米の商売、不動産、

営業倉庫の三本立てになって安定しています。

私は昭和三十一年仙台商業を卒業後、すぐに（株）中利商店に入社しました。県立古川高校に入れば、大学に入れないといけない、仙台商業高校に入れば簿記でも達者になって帰ってくる、という親の思惑から昭和二十八年、仙商に入学しました。中新田からはひとりだけでした。

三年の頃、鈴木耳鼻科の伯父が、これからは大学ぐらい出ていたほうがいい、と進学を進めてくれ、私もその気になっていましたが、親父は社会大学、実践大学があるからと大学進学を反対し、私は進学を断念して中新田に戻り、会社を継ぎました。

昭和十七年生まれの弟は東北学院大学を卒業して、山一証券に入りましたが、間もなく退職し、中新田に戻ってきて（株）中利商店に入社し、私の片腕として仕事をしました。

弟の光利と私は性格が違いました。弟は母親とそっくりで商売が大好きです。人のいうことはきかないし、思ったことはどんどん進めるところもよく似ています。私がどちらかというと父親似でたずなを締めてい

たからよかったのでしょうか。もし自分も一緒になって走るタイプだったら、会社を潰していたかもしれません。弟にはナカリエステートという不動産部門の会社を任せておりました。平成元年、三億の資金で設立した会社です。

平成三年頃、不動産が加熱して税制が厳しくなり、超短期はだめだとなりました。九〇数パーセントが税金になることになったのです。普通の会社のように五〇、六〇パーセントの税金にするためには上物をつけて売るとか、土地の形を変えて売るしかありません。土地転がしを厳しく規制したわけです。契約して工事がはじまると、もう終わったとして、また土地を買うということを繰り返し、バブル崩壊の兆しが見えた平成四年、借入金が十五億になったあたり、総量規制になったことをきっかけに私は全部手放したほうがいいと提案して売り払い、清算しました。結果として損得なし、ナカリエステートは借金もないかわり土地もないという会社になりました。あの当時、大損した会社が多かったことを思えば良ししたいと思います。

うちの場合、苦竹のマンション取得を皮切りに手掛けた不動産業はバブル以前の昭和五十年代から始めているので、それらはバブルには関係なく生き残ることが出来ました。不動産はすべて仙台です。

運と時流に乗った 強運もある。

父と母の並々ならぬ努力もありますが、商売には運と時流に乗るという要素も大きいと感じています。

まず、はじめに父、良一が三度も兵役に取られて、通算八年間も戦争に行ったのに無傷で帰還したということがあります。父が居なかったらやはり、ここまでくることは出来なかったでしょう。まさに強運です。

商売を乗り換えるのも運でした。商売替えのときには母の意見も強か

ったようです。

百姓して時を稼ぎながら、集荷業者に真先に手を上げたのも時を掴んだといえましょう。

猫の目のように変わる日本の農業政策でしたが、当社では上手に乗り切ることができました。

昭和三十一年頃は畑の作物もかなり生産されていましたが、昭和三十七年、米が一三七〇万トンの生産高では足りなくなつて輸入を行い、国を挙げて増産態勢に入りました。開田です。国は補助金をだして田んぼに切り換えることを奨励し、畑の水かかりのいいところや田んぼになる土地は、ほとんど水田に変わりました。秋田の八郎潟を干拓して大潟村が作られたのは昭和三十九年です（四十五年には米余りで減反政策が打ち出されますが）。

雑穀を作っていた開拓農家は酪農に切り替わりました。雑穀が少なくなつたところで、うちはくず米の集荷に出会つたわけです。いわゆるグ

リーンライスというやつで良い米を作る時に出る副産物です。扱っているうちに加工用にしようということになりました。岩手県や宮城県の地の元煎餅屋、種菓子屋とかはそれまで値段の高い良い米を使っていた。それをくず米に代えたのです。安いくず玄米を白米にして煎餅屋などに卸し、卸した先が粉にして使う。味噌やビールもくず米を使うようになりました。安いので需要が沸騰しました。高度成長期に入り、作れば売れるという状況になり、がんがん設備投資も行いました。今日あるのはくず米商売のおかげです。米は一年に一回しか取れないから保管しておく倉庫が必要です。機械設備も大きくしなければならぬ。

そんなことでこの四十年間、上昇気流に乗った勢いでやってきました。利益が設備や倉庫という“物”に化け、それがまた利益を生むという構造が時代の要求と相まって作られていったのです。税の仕組みをうまく利用した側面も大いにあります。

個人で脱税してもそう使えないものなので、払うものは払って不動産に代えてきました。それは人との出会いがあって学んだことでした。

その人は、「儲かると経営者は飲み食いしたり車を買ったりして経費として落とすが、そんな浪費は後になにも残らない。それよりも税金を払えば半分は残り、それが内部留保になる。また、個人名義で土地を買えば、相続税、贈与税などで三代目には無くなる。会社の資産にしておけば残っていく。あとは株式の移動でやればいい」と教えてくれ、なるほど、と納得した私は実行したのです。そのおかげで、会社には力が蓄えられました。

また、分社化も行いました。昭和五十七年、仙台市内にタカラ米穀株式会社という米の販売会社を設立、不動産管理会社ナカリエステートは六十二年頃、ボンリー宮城という炊飯会社は三井物産との合弁会社で平成三年に設立しました。ナカリ一社でやっているのとよらば大樹の陰でどうしても甘くなります。分社化をすれば、それぞれの存在意義が明確になり、業績もはつきりするのです。社員も納得します。もちろん、本社は扇の要ですからいっそうしつかりしないといけません。現在、全部の会社が黒字で推移しています。

まだ戦後の匂いが残る昭和三十一年から実践の中で、親の後ろ姿を見ながら経営してきました。ゼロからのスタートで、積み上げてきたことも良かったと思います。

母、あきゑについて。

母は率先して商売をやってきました。商才に長け、勘もよく、行動も早い。明日まで延ばさない、即実行の人です。

息子としてはいやいやといった、大変なお袋だと言うことが多々あります（笑）。

会社にくる電話をよくとるのでとらなくていいといったことがあります。高齢ですし、耳も少し遠くなっているし、どっち道、担当者に替

わらなければいけませんから。

「何をいうか、私はほけないように電話をとるんだ」と言われてしまいました。耳が遠くても集中力がすごいので、肝心の商売に関する用件はちゃんと分かるんですよ。これはすごい、と思います。長年の勘というのもあるのでしょう。人間、長生きするのは目的を持つことだと教えられます。

秋になると、くず米の買い付けが始まります。農家を一軒ずつ廻って集荷する業者が二〇〇人ぐらいいます。昭和三十五年頃からうちではその業者から米を買い集めています。その司令塔を当初から現在も母がやっています。秋になって、顔見知りになっている業者がなかなか来ないと、他の業者に売りに行ってしまったんじゃないかと、朝四時頃に起き出して電話しています。常に神経を張り詰めて状況を把握し、業者と信頼関係を築いているわけです。穀物は相場ですから、上げ下げを予測して価格を設定するのですが、長年の勘と経験で、その予測が的確なのです。「第二ライスセンター」が仕切り場で、秋にはそこに陣取っています。

す。毎年、春になると、もう秋が来るのを楽しみにしているようです。

ファンも多く、中利は中村あきゑというイメージを持っている業者もいっぱいいます。

私は昭和二十八年、初めて仙台に学校へいくために中新田を出た時は、叔父の耳鼻科の暮らしぶりにカルチャーショックを受けました。文化の差、生活の余裕の差を感じたものです。

母はいい暮らしをしたい、贅沢をしたいという個人としての欲望が薄いのですね。

商売一筋、中利商店が発展することのみを考えてきた人です。

父、良一とはいいいコンビ。

親父とはいいいコンビだったと思います。親父は商売のひらめきはよくなかったけれど、度胸のある、先々をきちんと考える人でした。戦後のインフレの時、土地を世話されると皆買いました。このあたりの地権者八人から買った土地が三〇〇坪になったわけですが、親父が買ったところが今日良い果実を結んでいます。その後、何十倍にも値上がりしました。今、中新田でも工業団地つくって買ってくれと言われるが、時代が遅いのです。二十、三十年前に工業団地つくって、どうだといわれるならわかる。うちは装置産業。機械もあるし、動かすための附帯設備、集塵装置、冷却装置、みな必要なので移せません。外したらスクラップですからね。

平成十年、親父が亡くなりましたが、相続問題は発生しませんでした。すべて会社所有にしておきましたから個人の相続財産が無い。だから、争いやいざこざが起きないのです。その点もよく考えていた人で、後で揉めないように遺言状も書いておりました。これも会社が存続することを考えた措置で、後継者の我々には有り難いことです。

自分だけいい思いをしない、会社のために何ができるか、というのが我々の原点でありナカリ株式会社の社風でもあります。

孫から見た、祖父と祖母

中村信一郎（談）

私には、おばあさんが商人、おじいさんが調整役をしながら会社を形成していったというイメージがあります。理想的な二人三脚ですね。

おじいさんは人間的にも穏やかで、でんと構えていました。孫の私たちをスキーや、海水浴に連れていってくれるなど、面倒も見てくれました。名言や格言が好きで、私も何度も聞いているうちにそれがおじいさんの遺言のように耳に残っています。経験こそ大事、学歴じゃないという意味の「見取り学問」。「競争相手は大きいものよりも努力するものが怖い」「肉を切らして骨を切る」。また、おばあさんの主張や意見が過ぎると「めんどりが時を告げるものではない」などとも言いました。

おばあさんは今、この年齢になっても一番商売熱心です。家族、親戚、

社員など、私の周辺で働いている人達の中でも商売に対する情熱は誰にも負けないでしょう。思ったらすぐに行動するエネルギー、自分の思う通りにしなければだめだ、と主張する頑固さもずば抜けています。

それが間違っていないことが多いので誰も異論を差し挟むことができません。生まれながらの商才というのか、それを絶えず磨き上げ、鍛え上げてきたということでしょう。八十九歳でも六十五、六歳の感覚でやっているんじゃないですか。現在は主に不動産管理を担当しているのですが、しつかり司令塔を果たしています。また、自分が実践してみせてこうするんだと若い者を指導しています。

人は年齢ではない、とおばあさんを見て感じます。魂と血なのでしょう。我々、その血をちゃんと受け継いでいるかな（笑）と思うことがあります。

明けて商売 暮れて商売

—— 中村あきゑものがたり

二〇〇三年十月二十一日発行

著者 中村 あきゑ

発行 ナカリ株式会社

代表取締役 中村 光良

宮城県加美郡羽場山島川原九十二番八十四
〇二二九一六三一三一六七

編集 株式会社 北燈社

代表取締役 長田 洋子

仙台市青葉区中央四丁目四―四―三〇五

電話 〇二二―二六六―〇一七〇

印刷 大日本印刷株式会社 東北事業部

仙台市宮城野区苦竹三―五―一

電話 〇二二―七八三―四七〇一

中村ファミリーのフォトアルバム

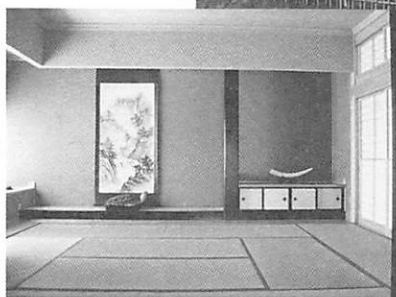
自宅新築（平成三年）



新築の家の居間で三代勢揃い（平成三年）



自宅（三世代同居）



和室



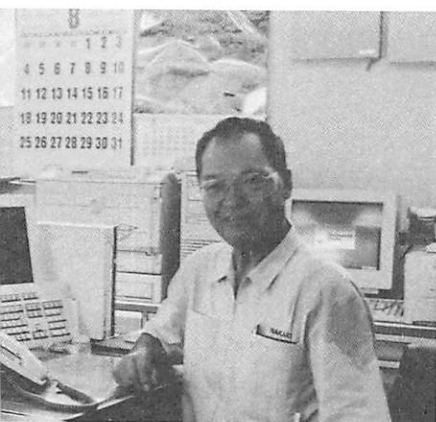
あきゑの米寿の祝い

(平成十三年一月)





雛まつり（平成十五年三月三日）





信一郎
良一

恵美子
あきゑ

星 裕子
光良

ちゑ子



社長夫妻（ちゑ子・光良）

姪の結婚式（昭和五十年頃）
あきゑ「南国土佐」を歌う
ホテル仙台プラザにて

中村家 家系図

初代 中村利三郎

うめ

良三 敏 あきゑ 良二

二代目

富子 (堀越の矢部園に嫁ぐ)

矢部 勇

真理 浩美 亨

梶谷 芙美代

光利

摩代 光太郎 知代

ちゑ子

光良

裕子 (星広二に嫁ぐ)

恵美子

信一郎

浩子 (中新田伊藤へニア商會に嫁ぐ)

四代目

五代目予定

礼(女) 克(男) 習(男) 朋(女)

鈴木家 家系図

初代 鈴木甚七

うん

甚吉 (長男で家業継承)

甚二郎 (仙台で医者になる)

はる (町内に嫁ぐ)

あきゑ (中利商店に嫁ぐ)

十力リ株式会社

概要
沿革
写真



Nakari Co., Ltd

会社沿革

大正12年 初代中村利三郎、肥料米穀の販売を開始する。

昭和26年 二代目社長中村良一、あきゑが主要食糧の農林省指定米穀集荷業者となる。

昭和31年 資本金300万円で、株式会社中利商店。

昭和34年 資本金1千万円に増資。

昭和36年 屑米搗精工場（日産15t）建設。

昭和44年 825m²の屑米搗精工場（日産100t）建設。

昭和46年 462m² 三階建の店舗中利商店ビル建設。

昭和48年 古川バイパス荒谷に4,950m²の土地取得、495m²の倉庫建設。

昭和49年 古川バイパス米袋に3,300m²の土地取得、825m²の倉庫建設。

昭和50年 本社敷地内に495m²の低温倉庫（第一低温）建設。

昭和52年 本社敷地内に430m²の低温倉庫（第二低温倉庫）建設。

中新田町大門に1,980m²の大型低温倉庫（第三低温倉庫）建設。

農林省指定倉庫となる。

昭和53年 中新田町菜切谷前田に酒米精米工場1,320m²に中野式酒造機6基建設。

鳴子町鳳鳴平に保養所を建設。

昭和54年 中新田町菜切谷前田に第一ライスセンタ（1990m²）建設。

昭和56年 仙台市にて米穀小売り免許取得。

酒米工場中野式6基増設。

昭和57年 仙台市高松にタカラ米穀株式会社設立。

昭和58年 本社敷地内にタカラ米穀(株) 大型集中精米工場(500²m²) 建設。

昭和59年 中新田町菜切谷前田に第二ライスセンター(6,000²m²) 建設。

昭和62年 第五低温倉庫建設(1,500²m²)

昭和63年東北運輸局許可営業倉庫となる。

平成元年 タカラ米穀(株) 流通センター建設(仙台市泉区上谷刈) 敷地面積1,800²m²

平成3年 ボンリー宮城(株) 設立(宮城県利府町)

炊飯工場建設。敷地面積2300²m²

平成6年 八号倉庫建設(2,300²m²)

平成8年 菜切谷倉庫建設(5,800²m²)

七号倉庫建て替え(820²m²)

平成9年 タカラ米穀(株) 流通センター移転(1,650²m²)

(黒川郡富谷町) 松下興産新富谷ガーデン 敷地面積5,000²m²

平成11年 無洗米(BG米) 工場建設

平成12年 外国産米穀調整工場建設

平成13年 8月1日 創立50年を記念し、ナカリ株式会社と社名変更

平成14年 無洗米工場増設

平成15年 ISO14001(環境マネジメントシステム) 認証取得

会社概要

●会社名 ナカリ株式会社

●代表者 中村 光良

●事業所 本社／宮城県加美郡加美町羽場字山鳥川原9・28・4

☎(0229) 63・3167 (代)

酒米工場(第一ライスセンター) 屑米選別工場(第二ライスセンター)／

宮城県加美郡加美町菜切谷前田42

☎(0229) 63・6795

低温営業倉庫／宮城県加美郡加美町大門1

☎(0229) 63・6795

●資本金 1千万円

●事業内容 主食用米及び特定米穀の加工販売

酒造米の精米および販売

肥料農業資材・農薬の販売

米穀集荷指定業

政府指定倉庫による政府米の保管

一般貨物営業倉庫

灯油販売

不動産賃貸

●売上高 80億(平成14年7月実績)

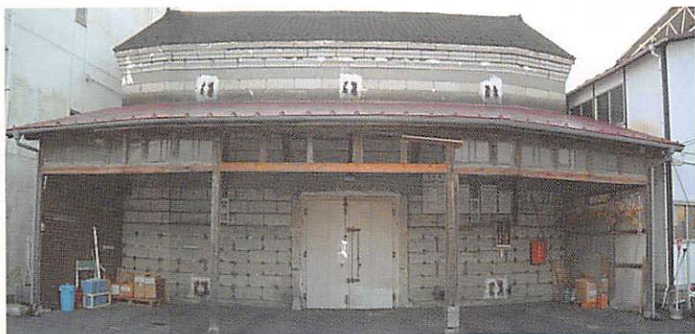
●従業員数 50名

●敷地面積 本社及び第一、二低温倉庫(10,000㎡)

第一・二ライスセンター(9,300㎡)

第三・五低温、八号倉庫(10,000㎡)

菜切谷倉庫(8,300㎡)



岩蔵



Nakari Co., Ltd

ISO14001認証



ナカリ株式会社



第一、二、
ライスセンター



第三、五低温、
八号倉庫



倉庫部門

本社



菜切谷倉庫





本社構内



無洗米工場内



朝礼風景



ナカリ株式会社 第2ライスセンター



食品安全管理室